

みる

観
察

混迷からの脱却のために

(社) 北海道地域農業研究所 所長 七戸 長生

最近のテレビのニュースを見ていて、いわゆるリアル・タイムのニュース報道が、とめどもなく打ち続く状態が大変気がかりになった。例えば、異常にゆっくりとしたスピードで北上した台風の場合には、一時間後、二時間後の到達地点の予想をめぐってのニュースであるから、その針路に関わりをもつ人に対しては、片時もテレビから眼をはなせない雰囲気のとりにしてしまつた。

また、ニューヨークの世界貿易センタービルをはじめとするアメリカの同時多発テロ事件の報道では、深夜にふと回したチャンネルから事件発生を伝える画面に、さらに一機が突っ込んで来る状況が映し出されたため、この後、一体何が起こるのか、という不安を募らせながら、テレビの前に座り込む羽目になった。

さらに、日本で初めての狂牛病の発生という正体のよく判らないニュースの際には、イギリスを発端とするこの病気のヨーロッパでの蔓延の経過を伝える解説風の情報と、この病気が日本にどのようなに

て侵入したのか、その経過の追求が不十分なままに行なわれる新しい報道とが交錯していて、ニュースが続けば続くほど、かえって不安と混乱が深まっていくようにさえ感じられた。

つまり、このようにして次から次へと新しい情報が伝えられることは、まさに情報化時代の最先端の傾向であると言えそうだが、その反面で、もう、このあたりで情報収集を一段落させて、それらをどう分析し、どう判断するか、どう行動すべきか、というところへ、さっばりつなげていかないというもどかしさが募ってくる。一体、いつになったら、明快な指針を与えてくれる情報が来るのだろうか。

よく考えてみればすぐ判ることだが、そのような都合の良い情報など、どこからも来る筈がない。さまざまな情報が乱れ飛ぶ中から、本当に頼りになる情報を選び抜き、それを分析し、評価した上で、はじめて自らの進むべき方向についての、いくつかの選択肢が出てくるのが通常である。それらの選択肢のうちのとれを選び、どのように実行するかは、

最早、情報の洪水とは切り離された別の次元の問題である。

この意味で、次から次へと絶えず新しいニュースが提供されることは、一見、大変好都合なように見えるが、その反面で、それらの情報を取捨選択し、自分の物指しで慎重に吟味する時間を失うようなことになるとしたら、かえって大変迷惑な時代になってきたと言わざるをえない。巷ではしきりに「失われた一〇年」とか、「混迷の一〇年」と言われているが、それは情報が多少不十分であつても、大きな誤りを犯さない判断力、決断力、そして「まずは自分でやれるところから着手して、一歩でも前に進む努力をする」という行動力が、著しく衰弱しているせいではなからうか。

確かに、社会経済情勢は目まぐるしく変化しているから、とても「天下の形勢を静観する」など悠長なことを言うてはおれない状況である。しかも、手をこまねいていても、誰かが助けに来てくれるわけではない。古い格言では「天は、自ら助ける者を、助く」というのが通り相場であるから、いかに衰弱していても、勇気をふりしぼって自助努力のスタートをきることに、これが混迷からの脱却の第一歩であらう。

では、実際に何から始めたらよいか。それは仲々むずかしい問題である。手当たり次第に、気まぐれにやる、というのは最悪の選択である。少なくとも、作物や家畜といった生き物を相手にしている農業の本質からいうと、五年、一〇年と継続的に努力を重ねることが大切であるような課題に取り組むことにすべきである。

そうは言つても、さまざま課題が錯綜しているから、この第一歩を容易に踏み出せないでいるのが実情である。しかし観点を変えていけば、そこに私達の病気の深刻な原因が存在しているのではないか。

つまり私たちは「われ先勝ちに、他人を出し抜いて、耳よりの情報をいち早くつかんで、又し手に乗の大儲けをしよう」という、かなりいかげしい風潮を野放しにして来た結果、いつの間にか、新しい活路を拓くために自ら汗を流して、刻苦勉励するといふ、最も伝統的な努力のあり方を忘れてしまった。これは「バブルほけ」とでも呼ぶべき憂慮に耐えぬ症候群である。いまこそ、この誤った風潮を一掃しなければならぬ。

第二に、目まぐるしい世間の流れに迅速に対応することは勿論大切であるが、永い間、承継がれてきた日本人の食習慣、食生活の特色をゆるがせにするわけにはいかない。自然の、旬の食べ物がいかに人々の健康につながっているか、といった点についてのまじめな消費者の再認識の動きを、決して過小に評価するわけにはいかない。この意味でも、流通主導の商業主義と二重映しになっている「消費者ニーズ」のメッキをはがすことが課題である。

第三に、とはいえ、人間は孤立しては極めて弱い存在である。五年、一〇年という継続的な努力を辛うじて持続させる上でも、一緒に努力の成果を認めあう仲間が存在が大きい。こういう厳しい時期だからこそ、互いに励ましあい、競いあう仲間を求めている。そういう連携こそ「T時代の利器を大いに活用したいものである」。

要するに、いつかはより好ましい情報が入ってくるだろうと勝手に期待して、緊急の課題に取り組むことを先送りしてきた風潮こそ、今日の混迷の元凶ではないかと考えるのである。避けて通れぬ緊急の課題を直視し、これに戦略的に取り組むことが急務である。